
山と少年、そして大きな穴

hisasi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山と少年、そして大きな穴

【Nコード】

N3220I

【作者名】

hisasi

【あらすじ】

少年が砂地で砂山を作っていると、次々に人が集まってきました。

なんだか楽しそう。しかし、次第に様子が変わってきます。

少年はどうあるのでしょうか？大きな穴とは？

(前書き)

人間は遊ぶ事が楽しいのであってそれは、子供心です。

それをもし合理的に、大人の価値観で考えたなら、途端につまらなくなりませぬ。

そんな気持ちを書いてみました。

そこは平らな砂地が広がっていた。

その砂地で一人の少年が砂地の少し湿った砂を手で集め、小さな山を作っていた。彼は少しずつ山を高くしては、満足そうに山を見つめて大きく頷くと、また砂を集めて山を高くする。楽しそうにそれを繰り返していた。

すると、一人の少女がやってきた。

「何やってるの？楽しそうね！」

少年は笑顔で砂を山の上に運び、高くなった山肌を叩いた。すると、小女は「私もやるわ」と言って、同じように山に砂を盛った。

二人共楽しいのか笑顔で、山を高くしようとして砂を盛った。すると、一人の若者が通りかかった。

「お前ら楽しそうだな！俺も混ぜるよ！」

その若者はそう言うなり、少年が笑顔を返す前に山に砂を盛り始めた。手が大きいので砂がどんどん高く盛られる。三人は汗をかきながら砂を集め始めた。しばらくしないうちに、男性と女性を通りかかった。

「私らも混ぜてくれ！」

二人はそう言って、少年が振り返らないうちに、腕をまくって嬉しそうに砂を集めた。女性は家からバケツを持って、ついでに友達を五人呼んだ。人数が多くなると、山のすそ野は広がり高さもどんどん高くなっていった。

「いいぞ！どんどん高くなれ！ああ楽しい！」

若者はそう言くと、少年に水を取りに行かせた。皆の喉を潤す為だからと、口を尖らせている少年に命令した。少年はそれに従った。そうして、少年が桶いっぱい水に水を汲んで戻ってくると、砂を盛る人数はさらに多くなっており、いつの間にかあの若者が皆に指示をしていた。少年が水を持っていくと若者はお礼も言わずにそれを飲

み、砂盛り作業に戻ろうとする少年を捕まえた。

「お前は砂運びをするんだ！」

そう言つて、赤いバケツを渡した。少年は彼を見上げたが、無言で砂を集めに行った。

帰つてくると、山は少年の背よりもずっと高くなつていた。そして、作業している人数も、老若男女様々になつていた。皆楽しそうだった。子供達が砂を運びに行かされ、得意顔でリーダー気取りの若者の指揮で、大人の男女が山を盛つていった。少年は高くなつていく山を横目で見ながら、砂を求めて歩き出した。砂でいっぱいになったバケツは重い。山と遠くの砂地との往復は疲れるだけで、まったく面白くなかつた。

やがて、砂の山は二階建ての家ほどになつていた。いつの間にか若者から髭を生やした立派な身なりの男性にリーダーが代わつていった。あの若者は大人達と一緒に汗だくになつて山の表面を固めていた。

一方、髭の男性は汗一つかかないで、ただ周りにいる屈強な男達に図面を見ながら指示していた。すると、何台もの大きなブルドーザーやショベルカーがやってきて、ますます山は高くなつた。手作業で砂を運んでいた子供達の仕事はなくなり、代わりに働く人の世話をする事に決められた。少年も髭の男性にムチで脅かされながら、働く人達にご飯を運んだ。もう、何日も同じ事を繰り返しているのだ。やがて、山を固めるのにも機械が入り、老人や女の仕事が減つた。なので、女達は髭の男性の周りに集まつてペチャクチャと喋り、老人を店先に立たせて物を売らせた。

砂の山はすっかりお城ほどの大きさになつていた。頂上は雲にも届きそうな高さだ。山の周りに人々が集まり、店が連なつてバザールのようだし、どこからかサーカスの一団も来てお祭の様な騒ぎになつた。そんな中、少年はムチで脅され、怯えた表情になつており、笑顔は完全に失われていたのだった。

そんな時、事件が起こつた。

あの若者が頂上の上に乗る、この山は自分の物だ！と大声を上げたのだ。これには髭の男性が激怒し、屈強な男達を使って若者を引き摺り下ろした。周りにいた人々は労働者から観衆に早代わりして、次々と若者に汚い言葉を吐いた。中には多くの人が山は自分の物だと言いつ張っていたが、髭の男性がピストルで若者を撃つて殺すと、観衆はまたすぐに労働者に早代わりして作業に戻った。そして、髭の男性が言った。

「この山は私のものだ。私が最初に見つけた」

そう言つて、山をさらに高くしようとした。

少年は髭の男性を見上げながら大きく溜息をついて、山を転がってきて山裾に横たわっている若者の死体に眼を背けた。そして、山から歩いて離れて行った。

少年は砂が取られた地面を、誰も使わなくなったスコップで穴を掘り出した。なんだか楽しそうで、口元が嬉しそうだ。口笛まで吹いている。すると、少女が近くに来た。

「何やってるの？楽しそうね！」

少年は彼女を笑顔で見返すと、白い歯をこぼした。いかにも楽しそうだ。少女はすぐにスコップを持ってきて土を掘った。

そうして二人が穴を掘っていると、二人を見ていた子供達が周りを取り囲んだ。

「俺らも混ぜてくれよ！」

少年が笑顔を返す前に、彼らは辺りかまわず穴を掘った。土だけからか穴はよくは彫れないが、それでも子供達は地面に穴を掘った。すると、それを見ていた労働者の大人達が近くにきて穴を掘ろうとして来た。皆がスコップを持っている。

「もう山はあきた。それに・・・」

そういうなり、大人達は一人、また一人とわれ先に思い思いの穴を掘った。協力するそぶりも見れず、大人達は自分だけの穴を掘っているようだ。なぜなら、山はあの髭の男性の物になったけど、穴

くらいは自分の物が欲しかったからだ。大人達は子供達のスコップを奪い、土を運ぶのを手伝わせた。

すると、山の上から下を見ていた髭の男性が山から離れていく人を見て激怒し、すごい勢いで駆け下りてきた。人々は穴掘りで彼に気がつかない。もう山には興味がないのだ。

彼は周りにいた屈強な男達に命令し、山盛りの為の機械を、穴掘りに使い出し、大きな穴を掘り出した。しかし、今度は彼に協力する人間はいなかった。誰もが自分の穴を欲しかったし、協力している暇がなかったからだ。屈強な男達はそれしかやる事がなかったし、髭の男から多くのお金を貰っていたので彼に従った。それに、やってみると穴掘りは山盛りよりも数倍楽しかったのだ。

だから、人々の穴はどんどん深くなっていった。今では、女達も老人だって穴掘りに勤しんでいた。穴を深く掘れる若者の所に娘達は進んで手伝いにきたし、髭の男性も機械に物を言わせて大きく、深い穴をひたすらに掘った。どの人も皆死に物狂いで、何かに取り付かれたように掘っていた。

もう、百メートルは達しているだろうか？

誰も彼もが穴掘りが楽しくて、楽しくて、「俺が一番深く掘った！」「いえ、私の方が断然深いわ！」「何を言う、わしの方が深く掘れてるわい！」と、まるで誰かに急かされるようにスピードを競って掘り続けているのだ。

そんな中、少年はとくにスコップを投げ出し掘るのをやめ、砂の山の中腹で腰かけていた。そして、皆が掘った穴が一つにつながるのを見届けると、転がっていた若者の死体を穴の中に投げ入れた。

「何だ？何か降ってきた！」

人々は一斉に掘るのをやめ、遙か上空にある空と砂の間にいる少年を見上げた。少年は自分を見上げている人々を見下ろすと、さも楽しそうに笑った。そして、自分の顔に指をさして、皆に指を掲げた。

するとどうだろう、掘っていた土が崩れ、砂山も音をたてて崩れ

だした。土や砂のなだれは人々の掘った穴の中に飛び込んでいき、やがて人々が穴から出るよりも早く、土と砂は大きな穴を塞いでしまった。

そこにあるのは砂ばかりの世界。

そして、一人の少年。

少年は汗を拭くとまた手で砂を集めた。楽しそうに笑み浮かべながら。

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3220i/>

山と少年、そして大きな穴

2011年1月14日14時28分発行